

第3回美里町立小学校建設検討委員会次第

日 時：令和7年7月23日（水）

午前10時～

会 場：美里町役場 2階201会議室

1 開 会

2 あいさつ

3 議 事

(1) ワークショップについて〔資料1〕

(2) 先進地視察について〔資料2〕

(3) 小中一貫校と地域交流のメリットについて〔資料3〕

(4) 必要な教室数について〔資料4〕
・小学5、6年生の教室の配置について
・交流の場の有無について

(5) 配置計画について〔資料5〕

(6) その他

4 連絡事項

5 閉 会

配布資料

- | | |
|-----|---------------------|
| 資料1 | ワークショップについて |
| 資料2 | 先進地視察について |
| 資料3 | 小中一貫校と地域交流のメリットについて |
| 資料4 | 必要な教室数について |
| 資料5 | 配置計画について |

子どもと大人が笑顔をつむぐ学校

【A】美里らしい「体験で地域とつながる開かれた」学校 ファシリテーター：立花（町職員）

【D】美里らしい「未来・地域住民・学年をこえて・自然とつながる」学校 ファシリテーター：佐藤（株式会社 EA）

自由につながるワクワクドキドキ学校

【B】なんでもできる「町民参加型の自由な」学校

【E】なんでもできる「つながることで、学びたくなる」学校 ファシリテーター：神部（教育委員会事務局 指導主事）

だれでも何でも学びあう学校

【C】「みんな仲間」人と地域とつながり「学びあい教えあう」学校 ファシリテーター：東海林（株式会社 EA）

【F】人と地域とつながる「NDM-何でも出来るみんなの」学校 ファシリテーター:熊谷(教育委員会事務局 指導主事)

教室 11/C4/F7)中学生が小学生に教える 11/C3/F8)キャンプの授業で防災 9/C6/F3)すぐ外に出られる 7/A4/D4)壁を開閉式にする 6/B0/E5)購買部 6/A3/D3)開放 塾・料理 6/A3/D3)広い 5/B4/E1)なんでも持ってきていい	特別教室 13/C6/F7)音楽・絵のプロが教えてくれる 9/A5/D4)体験型”コト” 9/A2/D7)地域住民とのチームティーチング 9/B3/E6)大きなホール 7/A2/D5)地域の人入りやすい(1階) 7/C3/F4)料理教室、音楽教室、実験遊び 6/B2/E4)たたみの部屋 6/A2/D4)カフェのような	図書室 15/C8/F7)カフェ併設 9/C6/F3)司書さん(地元の人)が居る、 オススメを教えてくれる 8/A3/D5)気軽に本を読める場がどこにでもある 5/B2/E3)町民がオススメの本を1人1冊おける
給食室 10/A5/D5)学年や小中間で交流 10/C6/F4)地域の農家さんの名前入り野菜 9/A1/D8)給食を地域の方に限定で提供 9/C4/F5)お年寄りがスクールバスで食べに来れる 8/B2/E6)目の前で作っているのが見れる 作る当番→食育 6/B2/E4)おてつだいロボットがある 6/B4/E2)町民も食べることができる 5/B3/E2)給食を作っている姿を見たい 5/B1/E4)バイキング 5/B0/E5)美里町の食材を使って収穫してつくる	美里らしい教育 なんでもできる学校 人と地域とつながる学校	体育館・校庭 16/C10/F6)地域の人がコーチになる 12/B5/E7)美里の木を使ったアスレチック 9/A6/D3)プレーパーク(何してもいい!) 8/C4/F4)暑くならない校庭、木陰があって休める 7/B5/E2)芝生があるスペースあれば 7/B2/E5)エアコン完備 7/C5/F2)小中で一緒に部活ができる 6/C4/F2)雨の日でも遊べる広い体育館 5/A3/D2)特別な体験(スケボー・ボルダリング) 5/B2/E3)学校で飲み物用意 5/B1/E4)キャンプができる
屋上 10/A4/D6)天体観測 保健室 8/A4/D4)居場所・逃げ場 校長室 15/C6/F9)誰でも寄れる校長室 環境 5/B3/E2)教職員の負担が減らせるように 教え合い 7/B3/E4)美里町の歴史	ICT 7/A4/D3)リアルとバーチャル両立 インターネット 9/C4/F5)外国の人、他の地域の人とつながる 学校の畑 7/C0/F7/学校の畑)販売につなげる あそび 8/C4/F4/あそび)地域の人遊び仲間になる 5/C3/F2/あそび)プレイリーダーがいる 5/C2/F3/あそび)イベントができる場所	地域との交流 5/A1/D4)地域住民と協力した放課後教室 学年をこえた交流 5/A2/D3)上の学年が下の学年に教える学習 通学 6/A3/D3)学校の外(通学路)遊ぶ場とする 6/A3/D3)バス停、歩く時間も大切 学童 6/C4/F2)学童に通って居ない子とも遊べるスペース

未来の統合小学校についてみんなで考えよう！

\\ みさと未来マップ //



第2回ワークショップの様子

町民の皆様を対象に、統合小学校について考えるワークショップを開催します！

vol.3

中学校と
小学校の
多様な学び環境
を考えよう
8/2(土)

日時 : 2025年8月2日(土) 13:30 ~ 16:00

会場 : 美里町役場 2階 201 会議室

対象 : どなたでも(先着 25名)

申込み : 氏名、人数、年代、お住まいの地区をお伝えください(8/1 締切)

電話 : 0495-76-0201 (教育委員会事務局 学校教育係)

電子メール : gakkyo@town.saitama-misato.lg.jp

LINE : 右記 QR コード参照



※人数を把握する必要があるため、お手数ですが開催日ごとに申込みをお願いします。

vol.1

未来の美里町
について語ろう
終了!
5/24(土)

美里町にはこんな
いいところがあるよ

将来子どもが通う小学校！
気になる！



vol.3

学校のこと、
地域のことを
考えよう
終了!
6/29(日)

vol.2

粘土を使って小学校の
模型をつくるらしいよ！



学校のビジョンと
コンセプトを
ビジュアル化しよう
8/24(日)

vol.4

違う地域の友達が
たくさんできるといいな



どれどれどんな
小学校になるのかな？



vol.5

まとめ 発表
9/20(土)

※vol.4以降の内容は変更する可能性があります。

主催：美里町教育委員会事務局、株式会社 EA (美里町立小学校統合基本計画策定業務委託 受託業者)



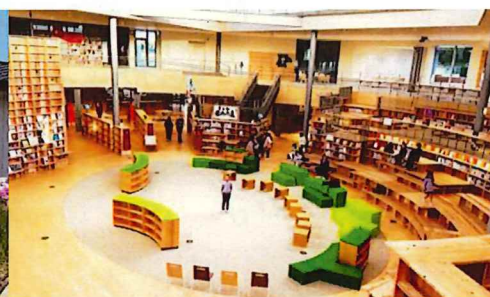
学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

『わたし』がはじまる場所

～大熊町立 学び舎 ゆめの森～

0歳からのシームレスな学び舎 義務教育学校・認定こども園

2025年7月4日



ステートメント

ゆめを見つける

ゆめを分かち合う

ゆめを育てる

自分の「好き」を見つけて
時間をかけてじっくりと向き合える。

学校には家族のような
仲間がいる、先生がいる。
失敗を責めることなく互いを認め合い、

小さな成功の喜びを分かち合える。

そんな幸せな子ども時代を
過ごしてもらいたい。

遊びの中から多くを学び、
学びの中にも遊び心を忘れず

自分らしい未来を切り拓く力。

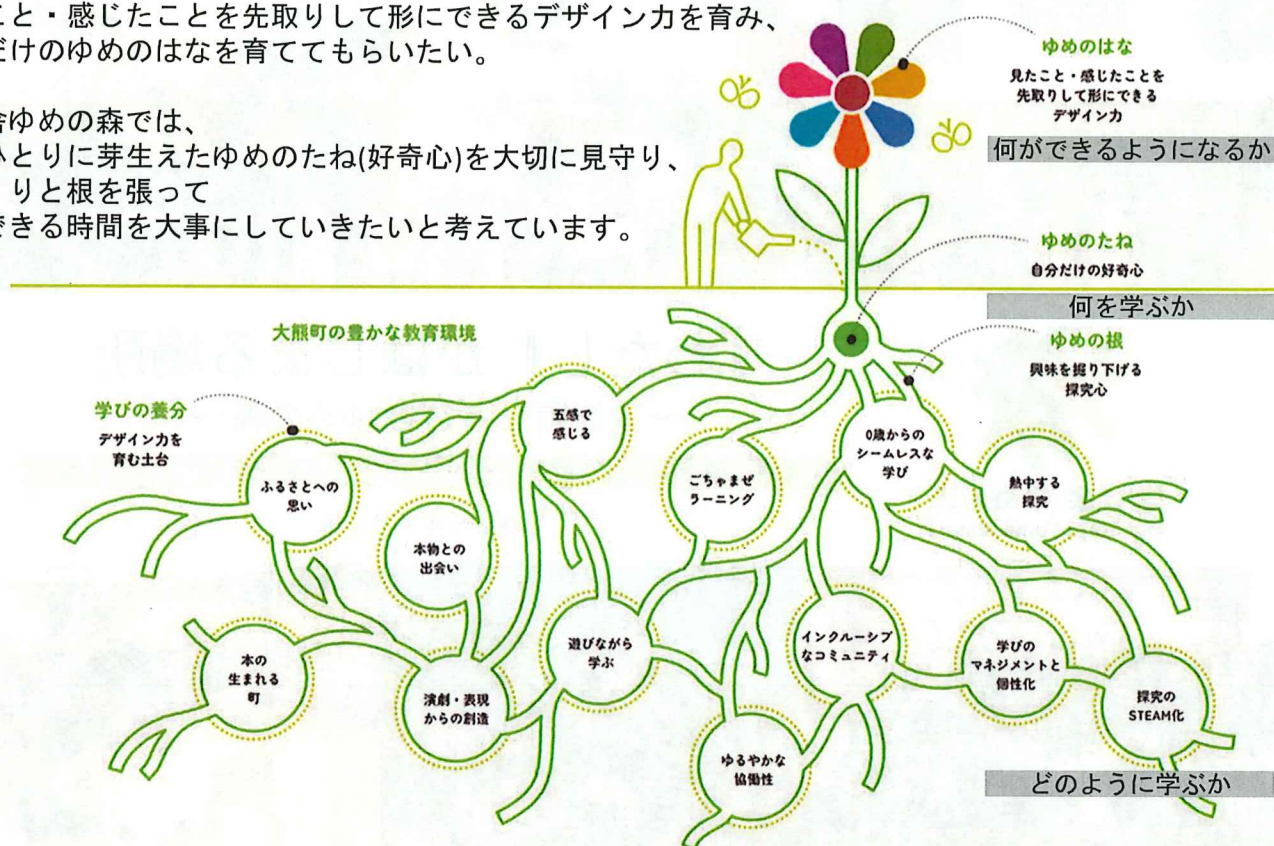
学び舎ゆめの森は、公教育の可能性を信じて
子どもたち一人ひとりが輝ける
夢の学校づくりにチャレンジします。

わたしたちの願い



これからの未来を生きる子どもたちには、
見たこと・感じたことを先取りして形にできるデザイン力を育み、
自分だけのゆめのはなを育ててもらいたい。

学び舎ゆめの森では、
一人ひとりに芽生えたゆめのたね(好奇心)を大切に见守り、
じっくりと根を張って
探究できる時間を大事にしていきたいと考えています。



3

大熊町立学び舎ゆめの森（義務教育学校・認定こども園）概要



○ゆめの森のあゆみ

2011年 園児児童生徒数 708名
(震災前就学予定 1,484名)

会津若松市に園・学校が避難
同地で12年間教育活動を展開

2022年 園児児童生徒数 9名

学び舎ゆめの森としてスタート
(義務教育学校)

2023年 園児児童生徒数 26名

大熊町に帰還し学校再開
同時に認定こども園を開園
2学期より新校舎へ移転

- ✓ 2011年3月12日早朝の避難指示により全町避難。
- ✓ 町内の園・学校は震災後に約100km離れた会津若松市にて移転開講
- ✓ 同地で12年間教育活動を展開し2023年大熊町に帰還
- ✓ 園児児童生徒数は段階的転入学により町帰還前の9名(2023年3月)から増。今後も増が見込まれる

○園児・児童生徒数 2025年6月23日現在

園	0歳	1歳	2歳	年少	年中	年長				計	合計
	4 +4	8 +8	7 +7	6 +3	6 +4	6 +4				37	93
学校	1年	2年	3年	4年	5年	6年	7年	8年	9年	計	
	8 +7	9 +9	9 +5	6 +4	6 +4	5 +5	6 +3	6 +2	1	56	
											+67

帰還や教育移住により、各学年赤字人数（内数）が2023年度帰還開校後に転入し園児児童生徒増が続く。
一方で、2025年度大熊町の子ども的人数は **1,124名** (5/1現在、就学前 291 小学校 552 中学校 281) と区域外就学が多数。

○ ゆめの森の「ビジョン」

「わたし」を大事にし、

「あなた」を大事にし、

みんなで未来を紡ぎ出す。

震災・原発事故に直面し翻弄された経験から価値観・学力観を転換。唯一無二の存在であるひとり一人の「自由」の実現を追究していく。

震災後、多くの分断・対立に直面するとともに、多くのあたたかい支援に支えられた大熊から、もっとも優しい社会を創り出していく。

自らが主人公となり理想とする未来を描き、他者とともに未来を創造する、学びと持続可能な地域実現の相乗効果を創出していく。

○ ゆめの森で大切にしていく「バリュー」

(価値観)



「自主自律」「共感協働」「承継創造」の価値観を大切にし、子どもたちの資質・能力の成長に繋げていくとともに、その価値観を具現化した「多様性」を尊重しWell-beingを追究する市民社会の形成に繋げていく。

○ ゆめの森の「ミッション」

(ビジョンを実現するために行う施策・事業方針)

私たちは、

子どもたちを年齢や資質能力で画一化したり標準化したりしない「**ごちゃまぜラーニング**」の環境を作り、

何かを教えすぎたり与えすぎたりせず、個が「**主体的に自らの学びをマネジメント**」し、

それぞれが教え合い・学び合い・共生する「**インクルーシブな学びのコミュニティ**」を形成し、

かけがえのないひとりひとりの子供たちが「**好奇心を発揮し、熱中し没頭していく**」学びと遊びが加速していく環境

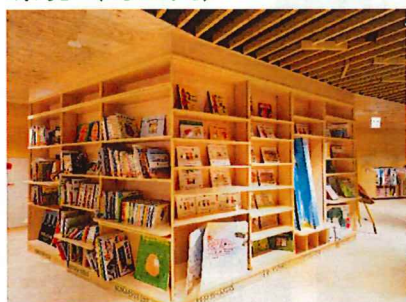
をデザインしています。 5

特色ある学び：0歳からのシームレスな学び

国内唯一の、認定こども園と義務教育学校の子供たちが共に学ぶ環境を生かしたシームレスな学びを展開。

- ・ 幼児期の「あそび（内発的関心・問いからの没頭）」の力を伸ばし、学校の「学び」も内発的な「探究」へと転換し、これからの時代に求められる、自ら問い、試行錯誤し、創造する力を育成
- ・ 社会情動スキルの基盤を形作る幼児期からの一貫した理念とカリキュラム
- ・ 0歳からのかけがえのない個が集い、共感・協働し、多様性を力に変える

環境（時空間）



多様な年齢の子ども達の自然な関わりを引き出す意図的な環境をデザイン。

園児・児童生徒の交流



共同行事、児童生徒による絵本の読み聞かせ、季節の遊びなどで日常的に交流。

教員連携



保育と授業の相互乗り入れにより、年齢を超え連続性のある遊びと学びを創造。

特色ある学び：学びのマネジメント



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

ICTを徹底的に活用し個別最適化した学習者主体の学びにより、子どもたちが自分の学びをデザインし、好きなことに夢中になれる授業を展開。

- ・ ひとり一台のタブレットでAI型教材を活用し、自由進度学習も取り入れた授業で知識習得の時間を大幅に圧縮し、探究を深化させていく深い学びを実現
- ・ 時間割を自ら組み立て、レベルアップタイムも活用して得意を伸ばし苦手に向き合い、学びの自己マネジメントの力を育成。長期休業の宿題も自ら設定

学習者主体の学び



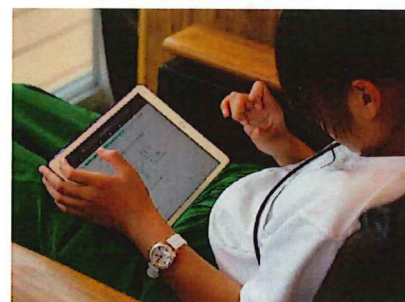
自由進度学習の手法も取り入れた授業で、習熟度や個性に応じて子どもたちが自らの学習を個性化していく。

時間割は子どもたちのもの



予定、人間関係（教員空き時間、仲間）、学習内容（伸ばしたい／補いたい）のマネジメント力を育成。

レベルアップタイム



それぞれが計画的に自由に使える、毎日25分のレベルアップタイムで得意を伸ばしたり苦手を補う。

※取り組んだ教科に応じ0.5コマで時数カウント 7

特色ある学び：持続可能な地域の実現に挑戦する「未来デザインの時間」



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

※生活科・総合的な学習の時間

自らの「興味」と「問い」を出発点として、大熊の豊かな人や歴史に向き合い、各教科の学習とも往還しながら、各自が大熊に貢献するプロジェクトを実践し、自らの生き方の創造に繋げる。

後期課程

個人探究として、公民分野の学習やフィールドワーク等を出発点に、地域の課題を調査し、課題解決のプロジェクトを構想し実践（R5年9年生）



社会科公民分野で学習する市場経済や生産活動の知識も活用し、町の特産物を生かした商品の開発、販売活動、決算等の一連の実践に取り組む。リヤカーを改造したカフェは技術家庭科の授業で制作。

前期課程

「ゆめラボ」として、STEAM各分野の専門性を発揮しながら、自然や地域と共に生きる方々と協働。各自の興味や問いを出発点に活動し探究の基盤となる力を身に付ける。夏休みも各自が主体的に探究。



（左）大熊の昆虫の生息に関心を持ち調査と標本づくりに没頭
（右）化石に関心を持ち、博物館と連携し採掘や調査に没頭 8

特色ある学び：演劇教育～あたらしい大熊の物語の創造と共有



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

地域と向き合いながら演劇表現に取り組み、自己肯定感や表現力、協働力や創造力等を磨くとともに、新しい大熊の物語を紡ぎだす。

- ・ 子供たち・アーティスト・教員が協働。大熊の地域や他者との出会いでの共感を出発点として演劇表現を創造
- ・ 子供たちがあたらしい大熊の物語を創造し、地域と共有



当校落成式（2023年9月21日）で舞台を披露。
子供たちのパフォーマンス・アーツで式典を包み込み船出を祝う。



音楽での合唱の技能や表現をみがく学習や、図工での衣装創作や案内チラシの作成等の学習



演劇公演（2024年11月7日）で地域の方等約200名が参観する中、子供たちが新たな大熊の物語を創造し、地域と共有。

9

特色ある学び：インクルーシブな学びのコミュニティ



学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

DE&Iの視点ですべての児童生徒の個別の支援計画を活用した体制を構築することにより、唯一無二の存在である児童生徒ひとりひとりの力を最大限伸ばしていくインクルーシブな学び舎を実現。

- ・ すべての子どもたちについて個別の支援計画を作成するとともに、毎週DE&I担当によるミーティングを重ね、多面的に個の特性を捉え、共通理解を基盤とした支援に繋げていく。
- ・ 毎学期本支援計画を活用しながら子どもたち・保護者・学校が対話を重ね、子どもたち自身の学びのマネジメントの力も育んでいく。

『私』がはじまる

学び舎 ゆめの森
Manabiya Yumenomori

年 名前 (男・女)

生年月日	年	月	日	姓	名
学年					
学年					
学年					
学年					

1学期

2学期

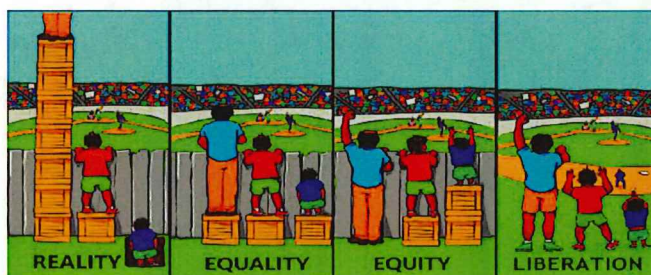
3学期

個別の支援計画『私』がはじまる

ゆめの森の DE&I

「ダイバーシティ：多様性」「エクイティ：公正性」「インクルージョン：包摂性」の頭文字をとったこの言葉は、社会や組織のWell-beingを追求する上での重要な要件。

ゆめの森は、多様な個性や特性を持つ子どもたちの成長を支えていくために、合理的な配慮による支援をすることで（エクイティ）多様性を尊重し（ダイバーシティ）Well-beingを追求する包摂的な優しい場所（インクルージョン）となることを目指す。



現 実 平 等（公平） 公 正 解放・包摂

10

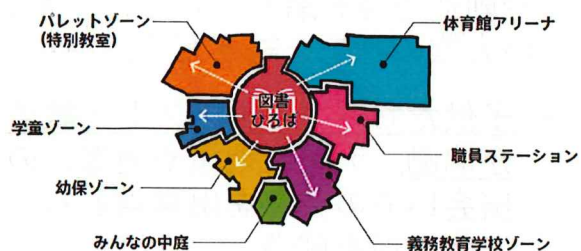
特色ある学びを支える環境



学び舎 ゆめの森
Manabi Yumenomori

ゆめの森の学びを体現する校舎

理念を形にし、遊びと学びの変革を引き出すための環境として、復興拠点となる大川原地区に子どもたちや地域住民も集うみんなの学び舎として竣工。



校舎全体が遊びと探究の舞台

ゆめの森の学びを支えるデザイナー（教職員）

正解のない学びに主体的に向き合い、内発的な「問い」を持って探究する学びを引き出し支えるために、教職員の位置づけを変革（呼称を変更）するとともに、研修を重ねる。

教 員 ▶ **デザイナー**
校長・副校長 ▶ **ゼネラルマネージャー（GM）**

- ・ 教員は「遊び」と「学び」の環境をデザインするデザイナー
- ・ 教員がすぐに手を差し伸べるのではなく、子ども自身がじっくりと考え、自己選択・自己決定する経験を大切に
- ・ 教員も共に学ぶ（伴走者・ファシリテーター）



学校や授業の在り方や、地域・社会のあるべき未来について教職員自身が探究し、徹底的に対話を重ねる「哲学する学び舎」としての姿を目指し、教員研修を重ねている。
2024年度は年間23回の研修を実施。

11

学び舎 ゆめの森 の うた（校歌）

作詞：谷川俊太郎 作曲：谷川賢作

ひとりっていいな ルンルン
みんなもいいな グングン
ひとりもいいけど でも やっぱみんなといっしょがいいな

ぼくとあなたと
わたしときみと
すきなものは ちがうけど
きらいなものは ちがうけど
ひとりとひとりとひとりでみんな
ひとりとひとりとひとりでみんな

ゆめのもりで
いっしょにまなぶ
ゆめのもりで
いっしょにあそぶ

それぞれのあずさをさがして
きょうのおおきなそらのした

ドレミファソラシド
ドシラソファミレド

ゆめのもりで
まなんであそぶ



全町避難を余儀なくされた町でゼロからつくる「学び」のふるさと。 大熊町立「学び舎 ゆめの森」が描く、 理想の地域と教育の姿

Okuma Town
Manabiya Yumenomori

TOPICS

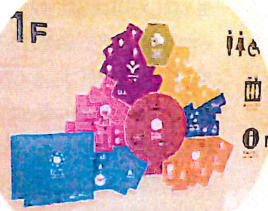
福島県双葉郡大熊町。太平洋に面したこの町は、2011年、東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故で全町避難を余儀なくされた。避難指示が解除されたのは8年後の2019年。現在でも、人口は震災前のわずか7%にとどまる。役場や医療福祉施設、商業交流施設を中心に復興の歩みを進めてきたこの町に、2023年4月、学校が再開された。それが大熊町立「学び舎 ゆめの森」だ。こども園、義務教育学校、学童保育を一体化させたこの施設では、0歳から15歳の子どもたちが共に過ごしている。震災から12年、町に戻ってきた「学び」の象徴ともいえるこの学び舎は、どのような思いで生まれ、どのような未来を描いているのか。副校長の増子啓信さんに、その歩みと思いを聞いた。

施設紹介 Information

POINT 01 まるで本の森のような学び舎



◀学校の正面入り口を入ると、木のぬくもりに包まれた空間が広がる。壁で区切られることなく連続する空間は、柔らかな照明に照らされ、優しい雰囲気を生み出している。離れた場所においても、なんとなく子どもたちの様子が伝わってくる。



◀校舎内のサイン計画は、東京オリンピックでビクトグラムを手がけた廣村デザイン事務所の協力を得た。部屋の名前もユニークで、一般的にいう「職員室」のエリアは「にっこごさぽーターム」。先生たちはいつもここにこして、私たちを支えてほしい」という子どもたちの願いを込めた。



▲ランチルームの手前には、背の低い手洗い場が。校内にはこども園も併設されており、ランチルームも一緒に使う。乳幼児から中学生までが校舎内を快適に利用できるよう、あらゆる設備やデザインが考えられている。

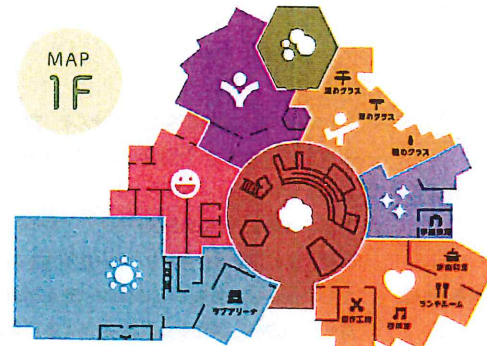
POINT

02 ゆるやかな協働性に支えられた学び

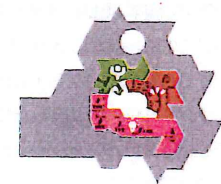


◀ランチルームでは、4人掛けのテーブルに座る場合、「4人揃ってからいただきますをしましょう」というルールがあるそう。揃って食べるためには声を掛け合う必要が生じる。なぜそのようなルールを設けているのか。増子さん曰く「大人の仕事もそうであるように、仕事を進める中で分らないことがあれば、誰かに聞いて解決していきますよね。それは学習でも同じだと思うんです。それが、ゆるやかな協働性に支えられた学びです。一人で全て頑張らなきゃいけないわけではなく、『できないことがあったら力を貸してね』と言える関係性が大事だと思います。ランチのような日常でも、そうした関係性を育むことができますよね」とのこと。

MAP
1F



MAP
2F



POINT

04 学びに没頭できる環境



◀より深い探究を促すための部屋も用意されている。学習内容に応じた道具や資料が揃えられており、子どもたちが学びに没頭できるよう、細部まで工夫されている。

POINT

03 地域と共にある学校を目指して



◀音楽室の床は高さを50cm上げて設計されており、発表会や研修会の際にも使いやすい。さらに左側の窓を開放すれば、外の地面と段差がなくつながり、屋外ステージに。地域の人々を招いたコンサートもスムーズに開催できる工夫だ。



◀手前にある網の遊具は、子どもたちに大人気の遊び場。この日も、年齢の異なる子どもたちが夢中で遊んでいた。その奥には園庭が広がっている。外に面した部屋はどれも建物の外と行き来しやすいように設計されており、開放感あふれる空間を生み出している。

POINT

05 個性をいかんなく発揮する子どもたち



▲ある男子生徒は、戦艦の模型作りに没頭していて、主体的に作品を制作しては、この場所で発表している。将来も、そのような仕事に就きたいという。作品を見た人からのフィードバックをもらえるように、アンケートフォームのQRコードも貼り付けてあった。



▲ある女子児童が考案したオリジナルのゆるふわキャラは、次々と新しい仲間が生まれているようだ。ラミネート加工されたしおりを無料で配布したり、人気投票を実施したりするだけでなく、絵本や文房具も作っているのだとか。その活動ぶりは、まるで作家としての第一歩を踏み出しているかのようだ。

POINT

06 本気になる大人たち



◀2階の多目的室には、開校前から数カ月間、コアメンバーが理念などを議論した跡がそのまま残されている。増子さん曰く「ここがこの学校の頭脳というか、心臓のようなもの」。見学した編集部にも、当時の熱量が伝わってくるようだった。



◀校舎屋上には、ゆめの森のロゴマークが、ロゴのモチーフは、大熊町の「大」という字を重ね合わせて、異年齢の子どもたちが遊びを通じて混じり合い、地域の人々と触れ合う様子を表現している。また「森」を形作るデザインにもなっており、地域とのつながりや自然との共生を象徴している。



インタビュー interview

PROFILE

ますこ けいしん
増子 啓信さん

福島県大熊町立「学び舎ゆめの森」ゼネラルマネージャー（副校長）

大学卒業後、小学校の教員へ。2011年の震災当時は小学校教諭。その後、教頭として福島県双葉郡葛尾村立葛尾小学校に赴任し、避難先から戻る学校の土台を構築。2019年に大熊町教育委員会主幹兼指導主事として着任。町教委の教育理念に基づき、「学び舎ゆめの森」の教育内容を考えると共に、校舎設計の基本構想、基本計画、実施計画に携わる。人とのつながり、緑を大切に学校経営・運営に取り組んでいる。

※この学校では副校長を「GM（ゼネラルマネージャー）」と呼ぶ。

子どもたちが混じり合って学ぶ環境

増子さんは、この学校の開校準備から関わっていらっしゃるそうですね。当時、どのような話し合いがされていたのか教えてください。

私が開校準備に関わるようになったのは2019年。当時、役場や多くの住民が避難していた会津若松市から大熊町に帰還する計画が進む中で、教育内容とそれを実現する校舎を設計することに、当時の教育長は強い思いを抱いていました。

大熊町の教育の最上位目標は、ゼロからイチを生み出す能力を育むことです。それを見たと、感じたことを先取りして形にできるデザイン力」と表現しています。この目標を深く考え抜く中で、とても特徴的な校舎ができあがっていきました。

また大熊町は以前から読書活動が盛んな町でした。読書を通じて先人たちの知恵を受け継ぎ、そのうえで全く新しいものを生み出し、自らの未来を切り拓く力を育むことを目指し、「温故創新」という言葉を掲げています。そのため校舎は図書ひろばを中心に据え、自

然とたくさんの本に触れられるようデザインされています。

0歳から15歳がシームレスに学べるという環境も、とてもユニークですね。

現在、子どもたちの数は72人（2025年1月8日現在）。その8割以上が大熊町以外の地域から移住してきた家庭の子どもたちです。年齢も背景も個性も異なる子どもたちですが、互いに影響を与えながら成長しているように思います。例えば、3年生の子が5年生の子と肩を組んで歩いている光景が日常的に見られます。他の学校では学年ごとに分けられるのが一般的ですが、ここでは異年齢で過ごすことが当たり前の風景であり、仲間として存在しています。「未来デザインの時間」（総合的な学習の時間）では、子どもたちが自分の好きなことに取り組む中で、興味が一致すれば、学年を超えて一緒に活動しています。そうやってつながっていくことが、子どもたちにとっても自然な姿だと感じますね。

いわゆる普通の教室もありませんし、空間がゆるやかなので、自由度が高い活動ができそうですね。

学年や学級という概念はありませんが、「自分の教室」や「自分の机と椅子」といった固定されたものはありません。その代わり、個人用のロッカーがあり、私物や文房具、教材などは各自で管理します。そして、その日のカリキュラムに応じて場所を移動しながら活動します。授業を行う際も、先生と子どもたちが相談し、学んでいる内容やそのときの状況に相応しい場所を選びます。例えば、小学1年生や2年生の国語の音読の授業をえほんコーナーにある読み聞かせの部屋で行うこともあります。単に四角い部屋で待つのではなく、自分たちで環境を選び取る過程一つにおいても、主体性を発揮する力を育ててほしいと考えています。



設置基準を満たすことができます。こうして、この学校の規模が決まりました。

一つ一つの空間も、非常に特徴的です。

校舎設計について、最初に提示されたプロポーザルの資料を見たとき、広がりを感じられず、正直なところ物足りなさを覚えました。設計者の方々と議論を重ねる中で、一般的な学校設計の「南側に窓があり、四角い教室が並び、長い廊下が続く」という標準仕様を一旦全て取り払い、「本当に楽しい学校とは何

か」ととことん追求しました。

当時、私は「教室って四角じゃなきゃダメなんですか？」と発言したようで、その一言が固定観念を打ち破るきっかけになったようです。軽井沢風越学園を視察後は、設計者の方々と議論も一気に加速しました。さらに「迷ったら突き抜ける方を選んでほしい」と伝えたことも、設計方針を大胆に進める後押しになりました。



設計者の方も戸惑ったかもしれませんね。大前提として、「学校は楽しい場所であるべきだ」という思いを大切にしていたんです。楽し

くなければ子どもたちは学校に来ないし、何かに挑戦しようという気持ちも湧きません。楽しいからこそ、「やってみよう」という次のステージに進むことができると思うんです。

設計においては、「デジタルとアナログ」「多様性と混在」という二つのキーワードを重視しました。「デジタルとアナログ」は、デジタル技術を活用しながらも、人と触れ合うアナログな時間を大切に空間にしたいという思いから生まれたものです。「多様性と混在」は、それぞれ異なる特性を持つ子どもたちが一緒に過ごし、どの子にも居心地良く感じられる空間、それぞれの子が「自分の居場所」を見つけられる環境を目指しました。

さらに、その先には、ゼロからイチを生み出せる話し合いができたり、アイデアが舞い降りてくるような空間づくりを目指しました。同じ四角形の組み合わせでは、どうしても画一的になってしまうんですね。そのため、この校

今は地域に貢献するフェーズ

とても特徴的な学校である一方、公立学校として先生方の異動もあります。先生方がチームとして協働するために、大切にされている習慣や文化はどんなことですか？

まずは「目線を合わせることを大事にしています。ただ、言葉だけで目線を合わせようとしても、教員それぞれの背景や価値観が違うため、どうしてもズレが生じることがあるんですね。だからこそ、教員が実際に動いて、試行錯誤を繰り返しながら共通の理解を深めることが重要だと思っています。

また、教員が「こういうことをやってみたい」と思ったときには、子どもたちの命に関わることでなければ「どんなことをやってみよう」と背中を押すようにしています。実践してみても成功すれば、達成感や自己効力感が生まれ、それが教員自身の主体性につながります。その姿を見た子どもたちにも自然と影響が伝わり、良い連鎖が生まれる気がするんです。

このように、教員が自分で考え、決めて、動いて、振り返る。そのサイクルを自分で回せるようになることが大切だと考えています。だから私たちは教員のことを「デザイナー」と呼んでいます。教員が「学びをデザインする意識」を持ちやすくするためです。学習者中心の学びの一つである自由進度学習を進めるため

には、教員がその学びをデザインできることが欠かせません。この「デザイナー」という考え方は、3〜4年前に始まり、今では学校全体の文化として根付いてきたと感じています。年度初めの4月や5月には、学校として大切にしたいことの大枠を話し合います。その後は、とにかく実践。教員一人ひとりの背中を押し、やってみる中で意義や価値を見出し、教員の主体性をどんどん育てていく。そんな風に取り組んでいます。

ゆめの森から巣立った子たちについても教えてください。

昨年、初めての卒業生を含め、数名が巣立っていきました。その中の一人は、心のエネルギーが足りなくなったと感じたときに、ふらりと学校に顔を出してくれます。半日ほど本を読んだり、小学生と話したりして過ごす。きつと気持ちが満たされるのでしょう。お屋敷には中学校に登校することもありました。そんな風に、この学校が彼らにとって拠り所になっているなら、それはそれでとてもいい場所なのかなと思います。

この学校には、生まれ育った場所が異なる子どもたちが集まっています。皆それぞれに、小さい頃、原風景があるはずなんです。だからこそ、その原風景を大切にしつつ、この学校が「学びのふる

舎には、一つとして同じ空間がないんですよ。子ども一人ひとりの個性も、それと同じだと考えています。

増子さんのその柔軟な考え方はどこから来ているのでしょうか？

当時の町長から「どこにもない学校を創ってくれ」と言われ、さらに教育長からも「学校らしくない学校を創ろう」と言われたことが、大きな原動力になっています。私自身、固定観念に縛られない発想をするのが好きだったことも影響していると思います。

この学校は、建物にも学習内容にも、そしてそこにいる人にも開放感があります。「月曜日に行きたくなくなる学校になったらいいな」といつも考えています。もちろん、突き抜けすぎて居心地が悪いのは問題ですが、「居心地の良い突き抜け感」を目指しています。このバランスこそが、学校づくりの鍵だと思っています。

さと」として、彼らの人生の礎の一つになればと願っています。

最後に、地域にとって、この学校はどのような存在でありたいと考えていらっしゃいますか？

一般的に「学校が地域の核になる」とよく言われますが、大熊町の現状を考えると、この学校は「地域に貢献するフェーズ」にあると感じています。魅力的な教育活動を展開することで、教育移住を考える方や大熊町に興味を持つ方を引きつけたい。移住を決断するような方々はエネルギーに満ちた人が多く、その活力が地域を活性化する原動力になっています。

若い世代が活躍の中で、移住者の方々が地域に馴染み、子どもたちも地域の人々とつながりを深めていく。こうしたつながりが広がることで、地域全体が学校を応援してくれるようになり、「地域と共にある学校」という姿が現実のものになると信じています。そのためにも、今は子どもたちが学校の外で活動することを特に重視しています。

大熊町だからこそ、地域の人たちの温かさがあがり、そんな人々と子どもたちが顔見知りになることが、学校と地域をつなぐ大切な一歩だと考えています。学校が地域を活性化し、地域が学校を支える——そのような循環を目指して、これからも取り組んでいきたいと思っています。

■小中一貫校のメリット（国立教育政策研究所調査資料抜粋）

小中一貫教育の導入の歴史①

- ① 小中一貫教育を初めて導入したのは広島県呉市であり、2000年度に、文部省から、研究開発学校※1の指定を受け、3小1中学校を統合した。導入のねらいは、義務教育9年間で修了するにふさわしい学力と社会性の育成、中1ギャップの解消、自尊感情の向上とされた。

※1「研究開発学校」とは、教育実践の中から提起される諸課題や、学校教育に対する多様な要請に対応した新しい教育課程（カリキュラム）や指導方法を開発するため、学習指導要領等の国の基準によらない教育課程の編成・実施を認める制度であり、1976年から実施されている。

- ② 2003年には、構造改革特別区域研究開発学校制度が創設され（特区研究）、これを利用して、2004年度から東京都品川区、2006年度から東京都三鷹市が小中一貫特区の取組を開始し、徐々に広がりを見せていく。

- ③ 2008年には、教育課程特例校制度※2が創設され（特区研究の全国展開）、小中一貫校導入のハードルが大きく引き下げられることになった。

※2「教育課程特例校制度」とは、文部科学大臣が、学校教育法施行規則第55条の2に基づき指定する学校において、学校又は地域の実態に照らし、より効果的な教育を実施するための特別の教育課程を編成することを認める制度

研究論文123号 2016.12「小中一貫教育校の制度化過程の分析」佐藤 史浩 参照

小中一貫教育の導入の歴史②

自治体や学校現場での取組が10数年以上にわたって蓄積され、**顕著な成果が明らか**になった。また、取組んできた自治体からは、取組を一層高度化させる等の観点から、**正式な学校制度として法制化すべきとの要望**があった。

教育再生実行会議の第5次提言や中央教育審議会答申※を経て、2015年6月の通常国会で、9年間の義務教育を一貫して行う新たな学校の種類である「**義務教育学校**」の設置を可能とする改正学校教育法が成立した。

※例えば、教育再生実行会議の第5次提言では、「子供の発達に応じた教育の充実、様々な挑戦を可能にする制度の柔軟化など、新しい時代にふさわしい学制を構築する」において、「小中一貫教育を制度化するなど学校段階間の連携、一貫教育を推進する」とされた。

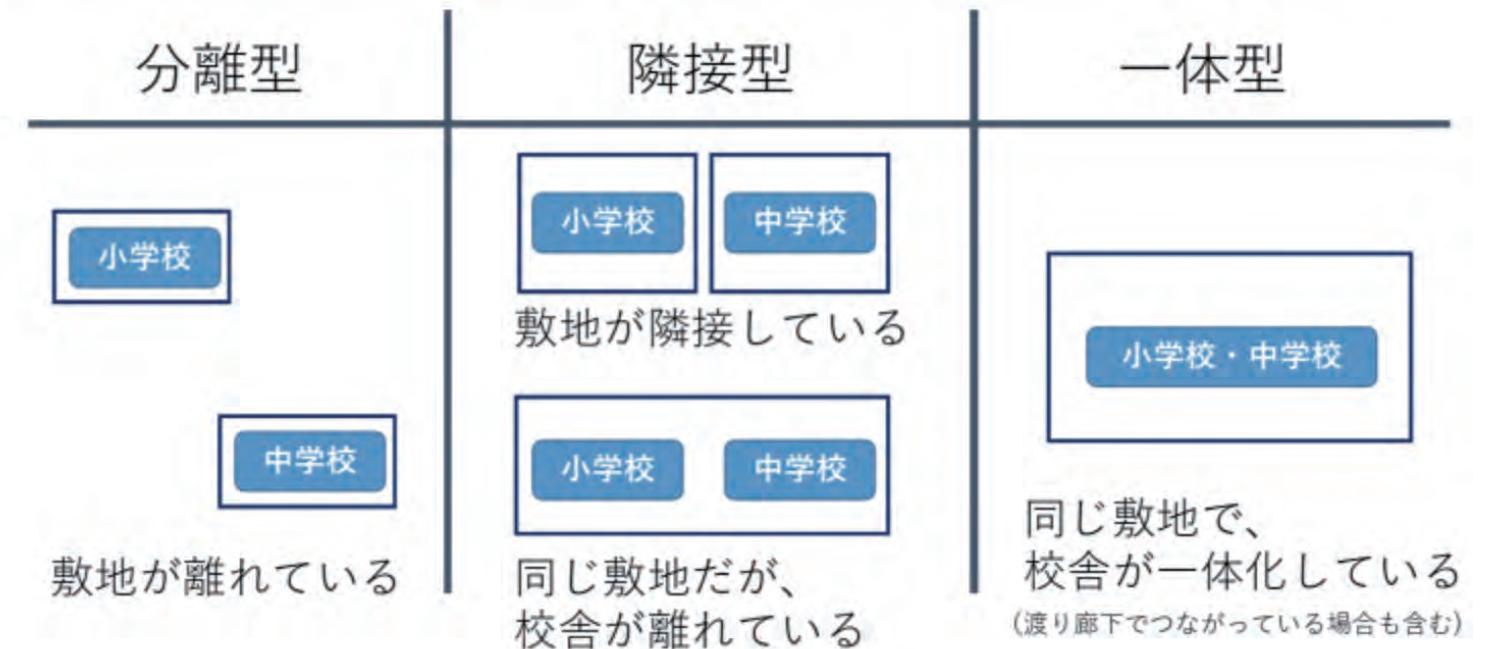
2016年4月1日、改正学校教育法が施行。小中一貫教育が制度として全国的に開始。

「小中一貫した教育課程の編成・実施に関する手引」平成28年12月26日 文部科学省 参照

上記のような文科省による小中一貫校の推進には以下のメリットがあるため

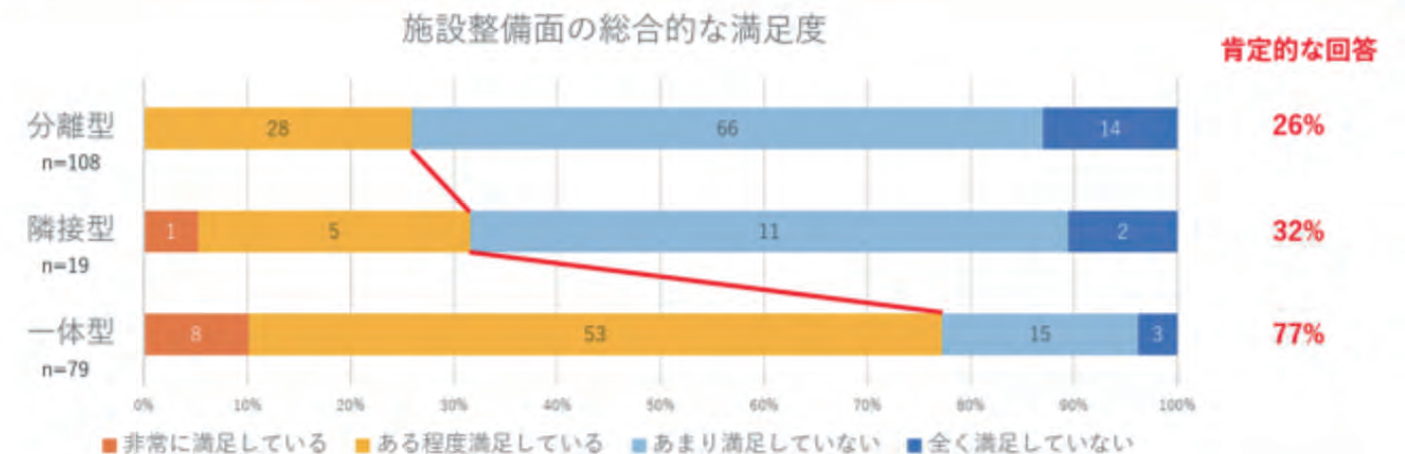
- ① 中一ギャップの解消
- ② 学力の向上
- ③ 幅広い異学年交流
- ④ 昨今の小学生の心や体の成熟に合わせた教育

施設の設置パターン



施設整備に関するアンケート調査結果①（国研実施）

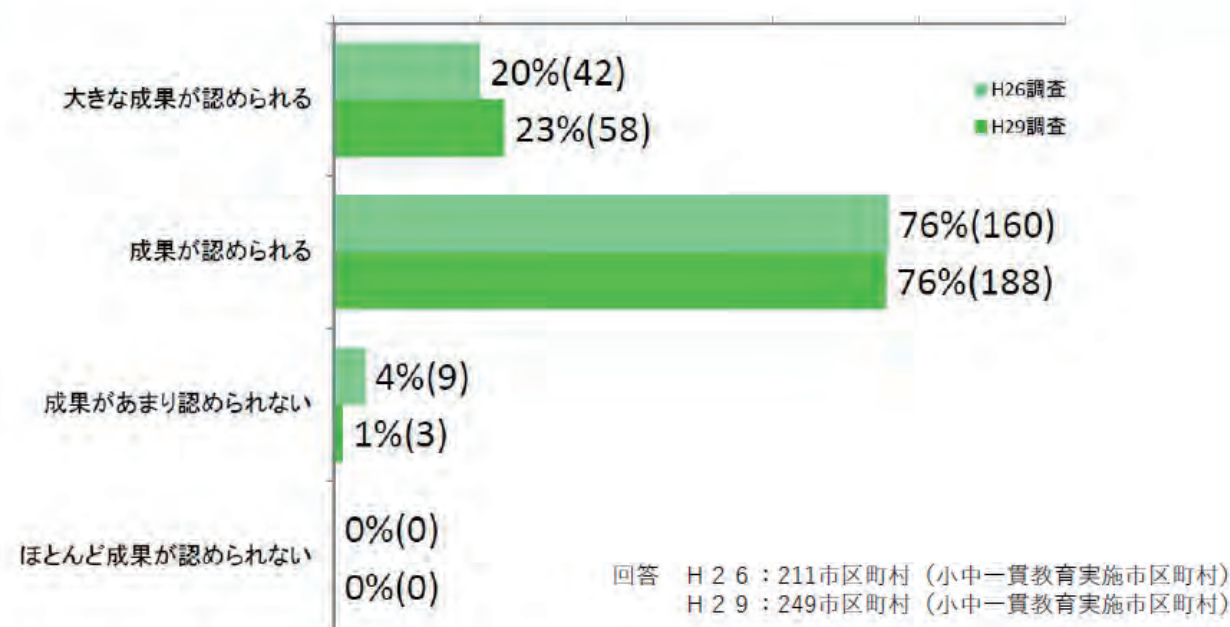
- ・施設面の総合的な満足度は、一体型が最も高く、隣接型、分離型の順に低くなる。
- ・渡り廊下がなく校舎が完全に一体となっている「完全一体型」の方が、渡り廊下で繋いで一体となっている「渡り廊下型」より満足度が高い。



「義務教育学校等の施設計画の推進に関する調査研究（国立教育政策研究所文教施設研究センター実施 平成30年8月）」参照
https://www.nier.go.jp/shisetsu/pdf/compulsory_education_schools_h3008.pdf

■小中一貫校であげられた成果（文科省調査による）

小中一貫教育を導入した成果①



「小中一貫教育の導入状況調査（文部科学省実施 平成29年3月1日時点）」参照

小中一貫教育を導入した成果②

（学習面）

- 勉強が好きと答える児童生徒が増えた（71％）
- 全国学力・学習状況調査の結果が向上した（61％）

（生徒指導面）

- 中学校への進学に不安を覚える児童が減少した（96％）
- 上級生が下級生の手本になろうとする意識が高まった（94％）

（教職員の協働）

- 小・中学校共通で実践する取組が増えた（98％）
- 教員の教科指導力の向上につながった（87％）

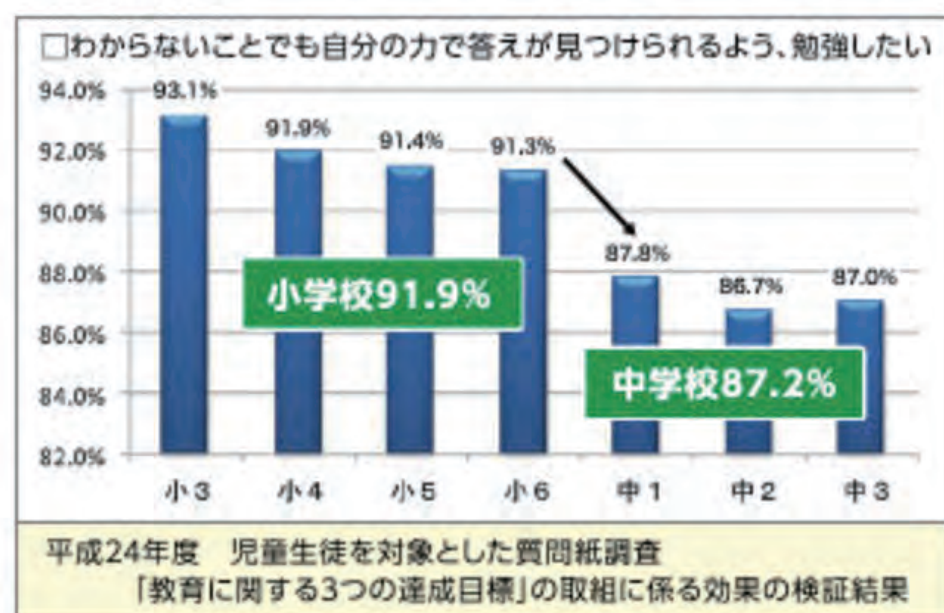
※H29調査において、公立学校で、「大きな成果が認められる」「成果が認められる」と回答した割合

「小中一貫教育の導入状況調査（文部科学省実施 平成29年3月1日時点）」参照

■埼玉県小中一貫校推進ガイドによる、小中一貫校を推進する理由

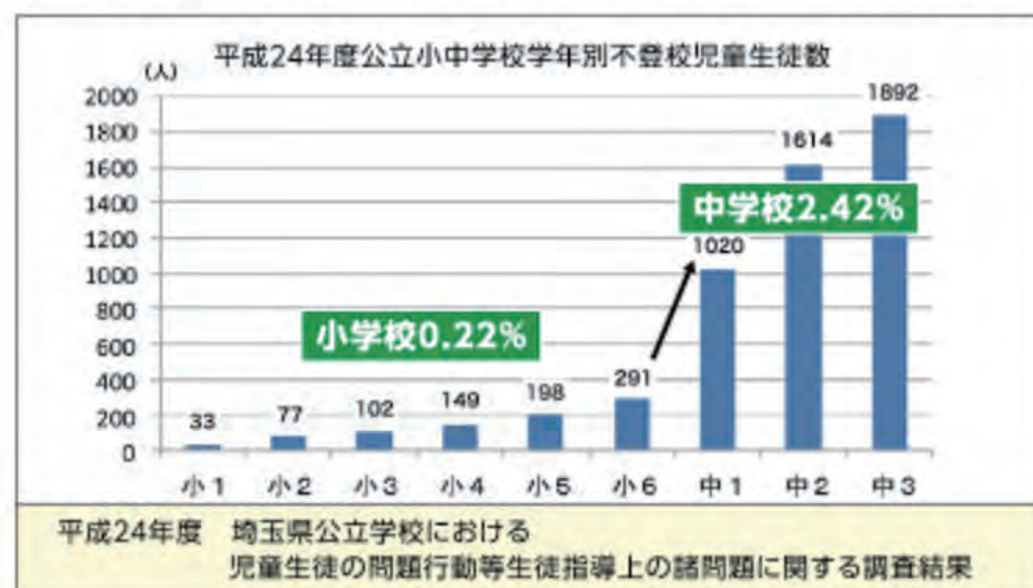
(1) 学習意欲の低下

小学校時代は高かった学習意欲が中学校進学後に低下する傾向があります。小学校段階から中学校での学習を見据えた教育を進めることで、学習への関心や意欲を低下させることなく子供たちの学びを継続することが求められています。



(2) いわゆる「中1ギャップ」

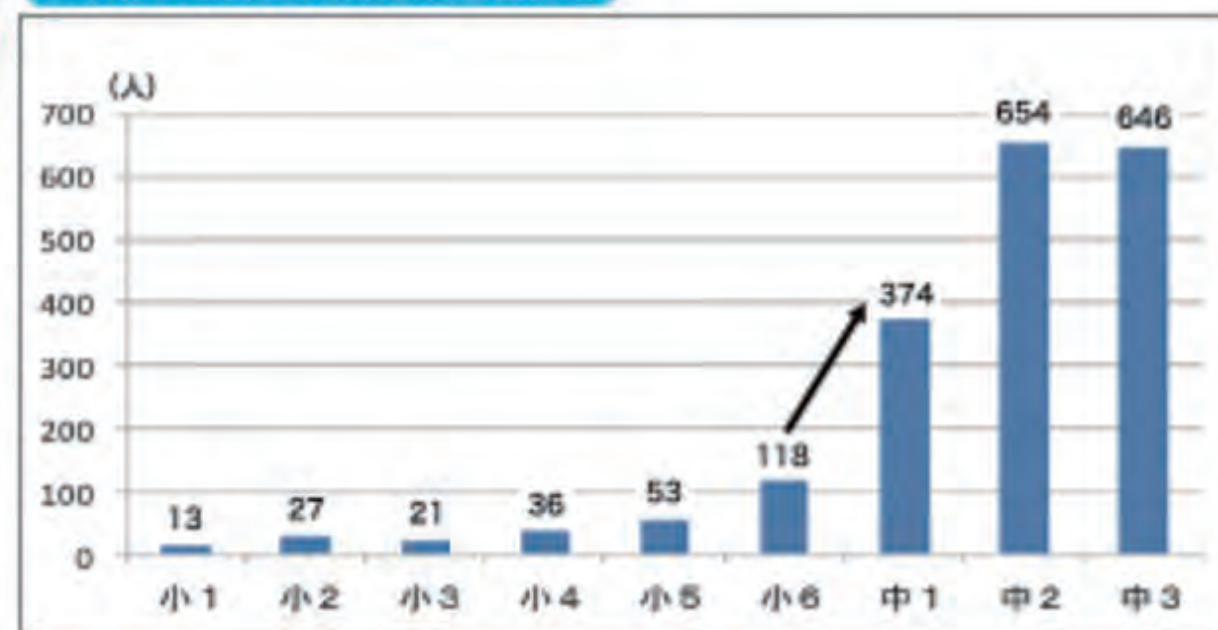
小学校から中学校に進学する段階において、不登校の児童生徒の割合が増加傾向にあります。増加の理由として、中学校進学後は、学級や部活動における人間関係等の変化が大きく、子供たちの心理的不安が高まるためと考えられます。小学校段階から中学校の様子を知り、中学校進学への不安を減らす等の改善が求められています。



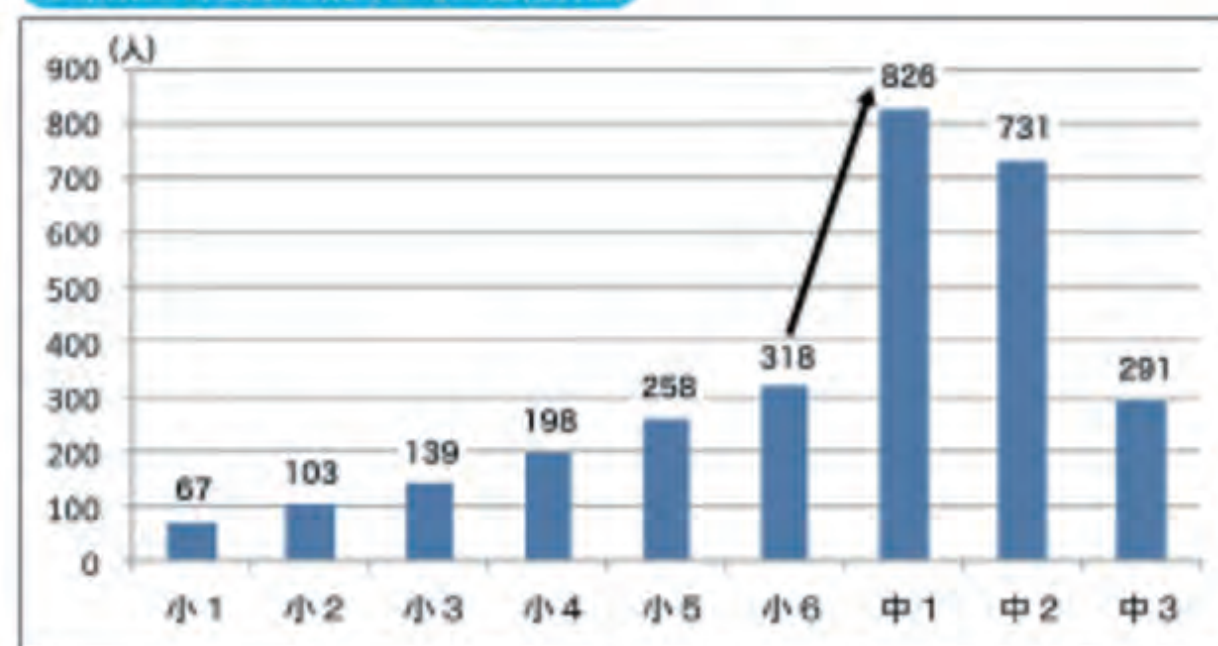
平成24年度

埼玉県公立学校における児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査結果

○平成24年度学年別加算児童生徒数



○平成24年度学年別のいじめ認知件数





■ランチルーム事例



■小学校棟必要室

種別	室名	室数	1室分の面積（㎡）	合計面積（㎡）	備考
普通教室	普通教室	18	72	1296	協議が必要
特別教室	理科室	1	108	108	
	音楽室	1	108	108	
	図工室	1	108	108	
	家庭科室	1	108	108	
	多目的室	1	108	108	
	特別支援教室	3	72	216	
準備室	理科室準備室	1	36	36	
	音楽室準備室	1	36	36	
	図工室準備室	1	36	36	
	家庭科室準備室	1	36	36	
管理関係室	校長室	1	36	36	
	職員室	1	144	144	協議が必要
	保健室	1	36	36	
	事務室、校務室	1	36	36	
	集中管理室	1	36	36	
	会議室	2	36	72	
	更衣室	2	36	72	
	放送室	1	36	36	
	印刷室	1	36	36	
	厨房	1	440	440	協議が必要
	多目的・交流の場	1	800	800	ホール、食事空間、図書空間、ものづくり空間が一体的に緩やかにつながり、小学生と中学生が会える場
	トイレ	4	36	144	
	階段	2	36	72	
	倉庫	6	36	216	
	廊下等			1093	必要居室の25%と仮定
	電気室機械室	1		208.45	廊下を含む上記合計面積の5%と仮定
合計				5673.45	

